

### 第3 問題作成部会の見解

#### 1 問題作成の方針

平成24年度の問題作成に当たっては、大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の目的と性格及びその役割を考慮し、従来の方針を継承しながら、現行の高等学校学習指導要領の理念に沿って、可能な限り新味を加えつつ受験者の学力を検出できるように配慮した。また、論理的思考力と感受性をバランス良く兼備した学力の重要性を考慮し、その達成度を判定できるものとすることを目指した。

以下は、問題作成部会として特に留意した点である。

- (1) 問題は昨年と同様に4問とし、「近代以降の文章」から評論と小説各1問、「古文」1問、「漢文」1問の配列とし、200点（各50点）の配点、80分の問題とした。特に本試験に比べてやや難度を上げるように工夫した。
- (2) 出題の範囲は、高等学校教育における新教育課程の実施を踏まえて、「国語総合」「国語表現Ⅰ」の教科書レベルとし、受験者の基礎的かつ基本的な学力が反映されるように配慮した。また、受験者の思考過程に沿った設問及び設問形式となるように工夫し、各設問の難易度がバランスの取れた問題となるように考慮した。
- (3) 問題の構成は、高等学校の国語教科教育の実態に即して、基礎的かつ基本的な学力が検出できるものとなるように配慮した。また、受験者の文章読解や思考過程を導き出すように工夫し、難易度においてバランスの取れた設問構成となるように考慮した。
- (4) 問題文、設問、リード文及び各選択肢の吟味には細心の注意を払うとともに、基礎的言語能力・認識力・想像力・判断力を含む総合的な国語能力を問うものとなるように工夫し、論理的な思考力と感性的な鑑賞力及び国語表現能力も判断できるように配慮して問題作成に当たった。なお平成24年度の追・再試験受験者は169名、平均点は5割台前半であった。これは本試験とのバランスを考えると、適切な数字であると言えよう。

#### 2 各問題の出題意図と解答結果

問題ごとに、問題文の選定と出題意図や工夫とを述べ、併せて受験者の解答結果を踏まえた試験問題に関する考察を述べる。

第1問 大澤真幸『電子メディア論 身体のメディア的変容』（1995年6月、新曜社）から出題。掲出箇所は、「Ⅵ マス・コミュニケーションの儀式」の全文から冒頭部分11行を除いている。マス・コミュニケーション効果について対照的な像を示す二つの事例を取り上げ、具体的な比較分析を行うことで、メディア社会の構造と問題点とを論じた評論。メディア研究の初期段階の成果であるキャントリルとマートンの調査を紹介し、両者から、情報の送り手の審級の質的な違いにより、他者の現れ方が異なることを論証し、メディアによって形成される共同体の在り方にも言及している。

「超越的な他者」「他者性」「偶有性」といった抽象的な用語によって著者独自の見解が導かれているが、いずれも一般的な興味・関心を持ちやすい具体例を挟んで用いられている。また、

対応関係を手掛かりに段階的に理解していける文章であり、読解力・論理的思考力の習熟度を計ることができる。構成・展開も明確なもので、評論文の問題として出題するのに適切な素材であると考えた。本文は、約4,200字。

問1 基本的な漢字問題。基本的な漢字知識とともに、傍線部前後の文脈への理解力を問う設問。(エ)・(オ)の正答率が高めであった。(ウ)の正答率は極めて高かった。問題文中や選択肢の語句の意味を正確に把握できるかを問うており、両者の意味が結び付きにくい問題に、若干正答率の低くなる傾向が見られた。

問2 本文の主題として論じられていく「近代社会のマス・コミュニケーションに対する高度な反応性」とはどのようなものか、抽象的記述の内容を確認させる問題。これに続く議論の流れに適切に導入させるための設問。正答率は極めて高かったが、出題意図に照らしても適切な結果であった。

問3 「荘子『胡蝶の夢』を想起させる」と述べる主張の根拠を考えさせる問題。本文で述べられている「事実」と「虚構」との対応関係を把握させ、本文全体の展開へとつなげる設問であった。傍線部最初の「これ」が指す内容を読み取ることで肝要である。正答率は妥当であり、出題の主旨から考えれば妥当な結果であった。

問4 通常、首尾一貫した現実を強固に作り上げるマス・コミュニケーションを通じての情報提供が、根本的な偶然性を隠ぺいすることで保証されていると指摘する中盤の要点を、指示語を手掛かりに読み解かせる設問。正答率は低めであり、誤答は④を選択した者が比較的多かった。選択肢では本文の表現が言い換えられており、内容を把握していなければ正答が導きだせない問題となっている。正答率に明確な差が見られた。

問5 筆者の最終的な結論が、序盤から中盤までで比較分析されてきた二つの対照的な事例をどのように結び付けることで導き出されているかを捉えさせる問題。二つの事例の類似性と対照性を手がかりに、論理的な関係を把握させるとともに、本文全体への理解を深めさせるための設問。正答率は非常に低く、誤答は④を選択した者が最も多かった。傍線部が逆説的な内容を含んでいることから難度が高めだったと考える。

問6 マス・コミュニケーション効果の研究に関する研究事例についての文章で、その論の展開に関する説明についての問題。特に、キャントリルとマートンの研究事例がどのような関係になっているかを確認することが求められている。正答率は非常に低く難解であったということになる。選択肢が4行に及んだことも影響したと思われるが、選択肢の説明内容を正確に読み取って、対照的な両者の研究事例に共通性を見いだしている点に気付くことが肝要である。論の構成に関する読み取りについて、受験者の習熟度に関きがあることが見られたと考える。

第2問 本年度は、三浦哲郎「メリー・ゴー・ラウンド」(『三浦哲郎自選全集』第八卷昭和63年4月10日初版)からの出題である。

「メリー・ゴー・ラウンド」は、チサという少女の視点に寄り添いつつ、父とのエピソードを描いた短編小説である。短編の名手による本作は、文学の奥深さ・面白さを受験者に知ってもらうには格好の素材と言えよう。無邪気な少女の視点を採用することによって深刻な場面の印象が緩和されており、作品世界がチサの主観によって理解されるような仕組みを取ってい

る。小旅行に出かけ遊園地で遊ぶ現実の世界と、チサが知るべくもない父の物語とが複層化され、短い物語ながら奥行きのある優れた文学作品となっている。父親がどのようにチサに接していくのかというスリリングな物語展開を通して、それぞれの場面における登場人物の心情を問う設問になっている。

問1 本文中の語句について、前後の文脈を踏まえた上で正確な意味把握ができているかを問う設問である。いずれも平易なものであるが、(ア)「首をもたげて」の正答率は妥当であった。受験者の日常語彙としてはなじみが薄かったせいだと思われる。(イ)「呆気なく済んだ」は非常に高い正答率で、(ウ)「生返事」は非常に高い正答率であった。

問2 上下真っ白な服は特別なハレの日の衣装であるが、娘を道連れにして自殺しようという意図で小旅行に出掛けている父親にとっては、死に装束の白という意味を有している。しかし、第三者にとっては、綺麗なウエディングドレスという認識であり、そのことによってチサの哀れさが際立っていることを読み取らせる設問である。正答率は極めて低かった。設問文の中で「本文全体をふまえる」と注記したが、問2の段階で物語全体を把握して答えなければならないことが、正答率の低さの要因と考えられる。

問3 傍線部B「こわくなんかないさ。父ちゃんが一緒だろう?」、傍線部C「こわくない。父ちゃんも一緒だ」の二つの台詞は同じ言葉であるが、それぞれに込められた父親の心情は全く違う。文中、類似した表現が配置されている意味と、父親の心情の変化を、本文の流れに即して捉えさせる設問である。場面の情景と父親の差し迫った心情を理解できていれば正答できる設問であり、正答率は極めて高かった。

問4 この部分はこの短編小説の末尾である。問3で父親の心情を問うたので、次に物語りの終結で示されたチサの心情を問題にする。最初は子供らしいわがままさを前面に出して父親に接していたチサが、父親に対していたわりの気持ちを抱くようになった心の変化の読解を確かめる設問である。正答率はやや低かった。

問5 この小説の読みの最終段階として、題名にもなっている「メリー・ゴー・ラウンド」が持っている意味を考えさせる。「メリー・ゴー・ラウンド」が持っている、生と死、純真と残酷、束縛と解放といった様々な多義性の中から、意味に含むものと含まれないものを正確に読み取らせる設問である。正答率は高くはなかった。

問6 「視点人物」「視点移動」「対比」「暗示」など、小説における表現上の特徴についての理解を問う設問である。視点人物についての正答率は妥当、対比についての正答率はやや低めといずれも平均的な正答率であった。

第3問 出典は鎌倉時代前期の物語『住吉物語』上下2巻で、作者は未詳。古本は平安前期の成立と言われるが現存せず、現存本は鎌倉時代の制作という。今回出題した部分は、下巻の初めに位置し、行方知れずの姫君を思って嘆く少将や異母妹の様子と、住吉で都や異母妹を懐かしむ姫君の姿が描かれている場面である。高校の授業で学習する王朝物語に擬した内容と文章であり、受験者には違和感なく読みこなせる問題文と言える。設問では、姫君を恋しく思う少将や異母妹の温かい心情と、それに呼応するように異母妹と仲良く暮らした都での生活を懐かしむ姫君の心情を読み取ることを柱に、基本的な語彙、文法事項、表現的特徴など、幅広く古文読解の力を確認することを狙った。人物関係図を示して複雑な人物関係を整理しやすくするよ

うに配慮し、読解の助けとした。全体の得点率は妥当であり、適切な難易度であったと思われる。

問1 基本的な古語の知識を問う問題で、古語を文脈に沿って理解できているかを確認した。

(ア)は「心空に」「あこがれ」の意味、(イ)は重要古語「うたて」の意味、(ウ)は「たまさかに」と重要古語「おはす」の意味を尋ねた。(ア)・(イ)に比べて(ウ)の正答率が若干低かったが、基本語の確認として適当であったと思われる。

問2 基本的な助動詞の活用と意味の識別について尋ねる問題。正答率は全体で妥当であり、基礎的な文法学習を行っている受験者にとって適切な問題であった。

問3 少将（男主人公）の心情を読み取る問題。登場人物の行動からその人物の心情を類推できるかどうかを問う。傍線部「さらぬやうに」の指示内容を確定するとともに、傍線部以前の心中語の部分「人の行方…わが身世にもあるまじきものを」を読み取ることができれば、正答にたどり着ける。内容読解の力が試される問題である。

問4 和歌の解釈問題。都にいる少将と、住吉にいる姫君という離れた場所にいる二人が詠んだ歌から、それぞれの心情を読み取らせる。本文に和歌がある場合は、和歌の解釈を問うというセンター試験の傾向を踏まえた問題である。和歌の解釈に前後の本文理解を加えれば、比較的容易に正答が導き出せる。正答率が比較的高かったが、後半の問題を解くための内容確認として適切な問いであった。

問5 姫君（女主人公）の心情を問う問題。傍線部「かくぞおほしつづけはべる」の「かく」の指す内容、すなわち後続の和歌の読み取りを中心に、「おほしつづけ」の意味する傍線部前半の「おほしめし出で」た内容、さらに「つくづくと…ながめおはして」という状況を総合的に解釈し、姫君の心情を考えさせる問題である。心情理解を通して本文末尾の理解を確認する問題となっている。正答率は妥当で、適切な難易度であった。

問6 出題範囲である「国語総合」の学習内容を踏まえ、表現の特徴と内容について総合的に尋ねる問題。場面構成、情景描写や人物描写の特徴などについて、語句や特徴的な表現と絡めて考えさせる。選択肢ごとに本文と照合して正否を判断させる問題であり、本文を丁寧に読んでいかないと正答が得られない。正答率はやや低めであるが、本文が正しく理解できているかという理解度の識別力が高い問題であった。

第4問 本文は、日本の江戸時代の学者・文人である頼山陽の没後に刊行された『山陽遺稿』巻七より、「笑社記」の前半部分を抜粋したものである。日本漢文の出題は平成2年度の追・再試験以来である。「高等学校学習指導要領」の改訂により、平成25年度入学生から「教材には、日本漢文を含めること」が明記された。現在の「国語総合」の教科書に載せられている作品数は少ないが、文章の内容によっては日本漢文出題の頻度が高まる可能性が考えられる。今年度はその先取りをする意味もあり、このような文章も読んでほしいというメッセージを含め、追・再試験において本文を出題した。総文字数は句読点を除き209文字で、やや長めではあるが抽象度は特に高くはなく、受験者にとって比較的平易で読みやすい文体であったと思われる。

内容は、詩社の命名の由来を説いている。筆者の主旨は「笑う」という一見安易な名前を付けることをとがめた人に対し、唐代の詩人の例を挙げ、心から笑うことがいかに難しいかを説

き、安直な命名ではないと説得しようとするものである。さらに、詩の語句のみに限定されず、自然現象にも時に応じて「笑う」という言い方があることを述べ、人間にも「笑う」ことが大切であることを主張する、含蓄のある文章である。それらの類例を挙げた意味を読解できるかどうかをポイントとして、筆者の意図を読み取らせるような出題を心掛けた。

題材は内容・構成とも明確で全体として読みやすい文章であったが、決して平易なだけではなく、受験者にじっくり考えさせる素材文であったと言える。本文の字数・設問数・難易度についても適切であったと思われる。外部からの反響は、「本試験とほぼ同等の本文であり、設問はやや易しかった」という意見と、「文章の内容は良い。そう難しくはないが、『国語総合』とすればやや難」という意見とがあった。

問5は一見すると小問として分量が少なく、問7と同じ配点に疑問を持つという外部の意見もあった。問5は単純に書き下し文にするという読み方だけの問題ではなく、前後の文脈を踏まえていないと正確に読み取れない部分であるため、あえて配点を問7と同じくした。また「この設問と第1問の評論の問5の読解問題の配点が1点しか変わらないというのは明らかに不自然」という意見もあり、全体の配点のバランスについては、今後よく検討する必要があるであろう。

また問6については、「面白い出題で良問。もう一度本文を読まねばならず、しっかり要旨が捉えられてよい」という評価がある一方で、「問3～5を経て、それがそのまま『三つの部分』であり、設問として重複している」という意見もあった。問7についても、「内容合致でなく『文章の主旨』を問うているのは漢文らしくてよい。問6と問7が補い合っていて妥当」という肯定的な意見もあったが、「問6の解答内容をそのまま文章化したものが本文の主旨であり、本文後半に関する設問の重なりが気になった」という疑問もあった。

一つの設問につき、見方によって様々な意見があり、今後の課題としてじっくり検討する必要があると思われる。

追・再試験の方が本試験よりも難易度が若干高くなるよう留意しつつ作題に当たり、結果として本試験よりも平均点がやや低くなった。第4問全体の得点率はやや低めであり、追・再試験の国語全体の平均の5割強に比べるとやや低いが、漢文を受験しない「ノーマーク」の受験者が1割弱いたことを考慮すれば、さほど難しくはなかったと思われる。また本試験の第4問の得点率5割台半ばと比べても、本試験と追・再試験との難度の差としては妥当であったかと思われる。

また、限られた時間内で問題を解く受験者の負担を考慮し、注は簡潔になるよう心掛けたが、短く簡潔にすることが必ずしも良いというものでもなく、注の書き方については改めて検討する必要があると考える。

問1 漢字の意味を問う問題。文脈の中におけるそれぞれの語の意味を正しく把握しているかどうかを問うた。(1)「尋」は常用漢字ではあるが「たづぬ」という読みそのままの意味ではなく、現代語と文脈とから③「もとめる」という正解を判断できると考えた。しかしそこに至った受験者は意外に少なかったようである。結果としては直前の「復」につられて誤答①「くりかえす」を選んだ受験者もほぼ同数おり、迷いやすい誤答の作り方の難しさを考えさせられた。(2)「蓋」は漢文独特の基本語の意味を求めたが、正答①「おもうに」の選択率は

意外に低かった。しかし次に選択率の高かった誤答②「むしろ」の選択率は正答①の半分であり、妥当な出題であったと思われる。

問2 書き下し文、及び現代語訳を問う問題。漢文の基本的な語法である「また…ならずや」の構文を正確に読めるかどうか、またその部分の意味を正しく理解できているかどうかを確認する設問である。この句法は『論語』の冒頭にある強い詠嘆を表す反語文である。これも基本形であるので解答は容易かと思われたが、正答④の解答率は4割台半ばであった。同じ現代語訳で「不亦」を部分否定として書き下した誤答②と迷った受験者が多かったようである。

問3 文意を問う問題。反語の句形を押さえつつ、文章の流れや助字「之」が何を指しているか、作者が引用している詩句と作者の言葉との対応関係などが正確に読み取れているかどうかを求めた。主語が「私」ではなく「唐の詩人」であり、目的語「之」の指すものが直前の「笑」であることが分かれば正解を見いだせるが、正答率はやや低めであった。上記をしっかりと理解して考えないと正答を選ぶのは難しかったと思われる。

問4 文意を問う問題。問7につながる、本文全体に関わるキーワードを含む部分で、漢文の基本的な読み方ができているか、文脈の読み取りができているかどうかを求めた。傍線部の主語となっている「咲（わらい）」の要素を前の部分から探し出し、「二者」の上に更に適切な「時」が必要だと筆者の述べる、その文脈を正しく理解することが肝要である。しかし直前の「時」が必要であると理解できたかどうかで正答②を選ぶか誤答①を選ぶかに分かれたようである。

問5 書き下し文を問う問題。文章の最後であり、問2のように現代語訳は入れず、反語の正確な読み方を問うとともに、文章の流れや作者の意図が正確に読み取れているかをも求めた。「可」を「べし」と読んだ受験者は多かったが、「也」を「なり」と読んで「笑いはないはずだ」と取った受験者は誤答③を選択し、反語とその意味＝筆者の意図を読み取り、正答⑤の選択率はやや低めであった。本設問の配点と、以下の出題内容等につき、第3項のような反響が見られた。

問6 表現問題で、筆者の議論の構成を考えさせ、その内容が正確に読み取れているかどうかを求めた。問3、問5、問7と関わるが、これらと本問を合わせた四つの設問の中では若干正答率が低かった。問5で誤答③を選んだ受験者は、問6でも誤答③を選んだ可能性が高い。この点は各設問間の整合性を心掛けた作問の姿勢が、図らずも表れたと言えよう。初めの部分には唐の人の詩や見解のみならず、筆者の考察も含まれていると読み取れた受験者は、正答を選べたようである。

問7 本文全体の主旨を問う設問である。詳細に読み進めながら、選択肢の内容の正否について判断させることにより、文章の内容を正確に理解できているかどうかを試す設問である。問3～6を参考にした上で本文をしっかりと読み込んだ受験者は、正答が割合容易に導き出せたと思われる。しかし、文章全体の流れを正確に把握していないと解けない問題であり、正答率は余り高くはなかった。

### 3 ま と め

基本的な問題構成は前年度を引き継ぎつつ、問題文の選定に幾つかの工夫をした。第4問漢文における日本漢文の採用はその一つである。また第2問小説の問題文は、心中（未遂）という深刻なテーマであるが、作者は幼い娘の視点を採用することで文学表現の奥行きを示している。今後とも難易度の維持に心掛ける一方で、教育現場に新鮮なメッセージを送り続けることの重要性を認識しながら問題作成に臨むことにしたい。